

三島市制施行
70周年記念

三^み四^よ呂^ろ人形の見た近代



平成23年

6月11日(土) - 9月25日(日)

三島市郷土資料館

TEL 055-971-8228 FAX 055-981-3730

会場：三島市郷土資料館1階展示室

開館時間：9:00~17:00

休館日：月曜日(祝日の場合は翌日)

入館料：無料(ただし楽寿園入園は有料)

〒411-0036 三島市一番町19-3 楽寿園内

<http://www.city.mishima.shizuoka.jp/kyoudo/>



みしまるくん みしまるごちゃん ©三島市

大衆文化 モダンの時代

大正から昭和初期にかけての日本では第一次大戦後の不況や関東大震災があり、1930年代に入ると徐々に軍国主義が強まってきました。このように社会に暗い影を落とすできごとがある一方で、震災後のモダン都市東京の出現、女性の社会進出やモダンガールの登場、文化、芸術、スポーツの発展など社会に新しい動きのあった時代でもありました。



パラソルさして

三四呂人形で見る

野口三四郎も一時期東京三越デパートで早撮り写真の機械技師として勤めるなど、都市文化の中で生活を送っています。そのせいもあってか、彼の作品にはこの時代の都市文化を写したものがいくつか見られます。なかでも「パラソルさして」や「メリーさん」などの洋装の女性は特徴的です。

「ハチ公」は昭和初期に渋谷駅前で有名になった、いわゆる「忠犬ハチ公」をモチーフにした作品です。三四郎は実際に渋谷駅へ何日も通ってハチ公をスケッチしたといわれています。「JAPAN」は背景の富士山の前に芸者と侍が対になっており、外国から来た観光客向けに制作されたものではないかと考えられています。



メリーさん



ハチ公



JAPAN

… 当時の三島 …

この時代の三島を振り返ってみると、昭和5年（1930）の北伊豆震災により壊滅的な打撃を受けた街並みが数年後には復興を遂げ、看板建築に代表される近代的な街並みに生まれ変わりました。看板建築とは店の前面を立て板状にし看板のように自由にデザインが施されているもので、表面は防火のために銅板、タイル、モルタルなどが使われています。関東大震災後の東京で数多く建てられました。

また、昭和9年（1934）には丹那トンネルが開通し、念願の三島駅が開業しました。



震災復興後の久保町（現中央町）

海外に「日本」があった時代

明治の後半から戦前までは日本が海外に領土を有していた時代でもありました。帝国主義の時代から第一次大戦、ベルサイユ体制を経て徐々に植民地を持つことが正義に反することだと認識されるようになっていきましたが、まだ当時の人々にとっては海外に領土があることは当たり前のことでした。



官妓



上/半島の女 下/半島スケッチ



三四呂人形で見る

主要な植民地のひとつ、朝鮮半島は三四郎にとっても重要な地でした。昭和4年（1929）の朝鮮博覧会に自動写真撮影館の技師として三越から派遣された三四郎は博覧会后1カ月ほど朝鮮半島を旅行し、朝鮮の風俗、風景など多数のスケッチを描きます。この旅行が転機となり帰国後、三四郎の人形制作が始まったのでした。また、このスケッチに描かれた人物や風景のやわらかな筆致から、三四郎の視点が植民地を日本の権益の対象とみなしていた政治家や軍人、一旗揚げようと大陸へ渡った冒険的商人などとは違っていただのではないかがわかります。

… 当時の三島 …

現在の楽寿園が朝鮮王朝の王子であった李垠殿下の別邸となっていた時期があります。これは明治43年（1910）の日韓併合の翌年から昭和2年（1927）までの期間で、殿下は三嶋大社の祭りを見物したり、小浜池に船を浮かべたりすることもありました。また、三島高等女学校（現県立三島北高等学校）他2校に奨学資金を下賜しており、三島高等女学校では優秀な生徒に「李王賞」が与えられました。



絵葉書「李王世子殿下御別邸」

戦争の足音の中で

三四郎が三四呂人形を本格的に制作したのは昭和5年～11年頃（1930～1936）です。この時期は昭和6年（1931）満州事変、昭和11年（1936）二・二六事件、昭和12年（1937）日中戦争開始と次第に戦争の色が濃くなっていく時代でした。



トンボとり



坊やのだ

三四呂人形で見る

このような時代にあっても三四郎は「美しい童心がお互いの心の中から日々失せて行く事を思ふと何よりも淋しく悲しまざるを得ない」といって、厳しさを増す世相に抗おうとしたのか子どもや家族を主題にした作品を作り続けます。「パラソル」「春日だんらん」「少年少女の四季」の3作品ではかわいらしい子どものそばに小さな動物が寄り添っています。

三四呂人形では子どもとともに犬、猫、牛、馬、蛙などの多くの動物も主題となっています。



パラソル



春日だんらん（三嶋大社蔵）



少年少女の四季

… 当時の三島 …

大正9年（1920）以降、現在の文教町に野戦重砲兵連隊2個連隊が駐屯しており、軍都として栄えていました。昭和7年（1932）の上海事変の際には連隊の一部部隊が派遣されています。そして、その後の日中戦争・第二次世界大戦でも中国大陸や東南アジア方面で戦い、多くの戦死者を出しました。



中国大陸へ出兵した第2連隊

人形芸術の画期 人形作家たちが求めた新しい表現

昭和の初めから戦争による統制が厳しくなる昭和15年頃（1940）までは、人形芸術に新しい表現が生まれた大きな画期であったといわれています。優れた技術を持った伝統ある専門の人形職人と独創的な表現を持つアマチュア人形作家が一体となり、新しい人形芸術を切り開こうとしていました。この時期は三四郎の活動期間とほぼ重なります。

三四呂人形で見る

三四郎は人形研究家山田徳兵衛氏に高く評価され、その後、昭和9年（1934）に堀柳女、鹿児島寿蔵らの人形作家仲間とともに甲戌会こうじゅつかいを結成しました。昭和11年（1936）には第1回総合人形芸術展覧会で最高賞を受賞します。三四呂人形はこのような同時代の多くの人形作家との関係のなかから生まれました。

三四呂人形の中には和紙1、2枚しか張り重ねられていない非常に軽い張子人形があり、この軽さによって動きのある表現が可能になっています。「影ふみ」では走っている女の子の片足のつま先だけを台に接地させることで、軽快さが表現されています。「春日庭」では、ブランコなどが固定されておらず僅かな振動によって揺らぎが起るようになっています。「黒髪」の女性の斜めに傾いた姿勢や「五月の賦」の風になびく鯉のぼりも張子の軽さあつてのものです。



影ふみ



黒髪



上/春日庭 下/五月の賦

三四呂人形の見た近代

三島市は、昭和16年4月29日に誕生し今年で70年になります。この直前の大正・昭和初期には野戦重砲兵連隊2個連隊の市内への移転（大正8、9年[1919,20]）、北伊豆震災（昭和5年[1930]）とそこからの復興、現在の三島駅の開業（昭和9年[1934]）、三島町と北上村との合併（昭和10年[1935]）など現在の三島市を語る上で欠くことのできない重要なできごとがありました。

この時代はまた、三四呂人形の制作者である野口三四郎（明治34年[1901]～昭和12年[1937]）の生きた時代とも重なります。張子でつくられたものが多く、素朴で愛らしい表情を持つ三四呂人形のなかにも当時の世相が反映されています。そこで今回は、三四呂人形を通してうかがい知ることができる同時代の世相などを関係資料を交えて紹介していきます。



上：「水辺興談」 左下：「里子」 右下：「桃子」

大衆文化 モダンの時代



「パラソルさして」



「メリーさん」



震災復興後の久保町（現三島市中央町）

海外に日本があった時代・戦争の足音のなかで



「官妓」



「パラソル」



中国大陸に出兵した野戦重砲兵第2連隊

※紙面の三四呂人形はすべて個人所有（三島市郷土資料館へ寄託）

次回展示 【開館40周年記念】

平成23年 10月29日(土)～12月4日(日) 「三嶋暦」

三島市郷土資料館

〒411-0036 三島市一番町19-3 楽寿園内 TEL 055-971-8228 FAX 055-981-3730
<http://www.city.mishima.shizuoka.jp/kyoudo/>

【ご案内】※三島駅(南口)から徒歩5分 市立公園 楽寿園内

